

ピーク冬から初夏に

シラスウナギ遡上に異変

東大研究所調査

29.3.23

海流に乗って太平洋から日本沿岸にやってくるシラスウナギ（ウナギの稚魚）の遡上（そじょう）のピークが従来の初冬から、翌年の初夏に大まかすれ込んでいることが東京大気海洋研究所の調査で21日までに分かった。調査場所は神奈川県だが、3年連続で深刻な不漁に見舞われた本県でも以前から漁師らが遡上の遅れを指摘。全国3位の生産量を誇る県内養鰻（よしまん）業界からも漁期の延長や期間設定の見直しを求める声が上がっている。

県内「漁期見直しを」

調査は同研究所の青山准教授の研究グループが2009～11年に神奈川県相模川河口で実施。09年11月～11年

10月の毎月、新月の夜に川を遡する稚魚を捕獲して個体数を数えた。09年12月～10年2月は1～5匹だったが、3月に2匹に増加。いったん減った後に増加して6月に最多の62匹が捕

れた。以降も同様の傾向が続き、11年は5月に126匹、6月に152匹を採捕。青山准教授は「これまでの回遊パターンと大きく異なる現象である可能性が高い」と語る。大淀川を遡場とし、県内最



遡上のピーク時期が大まかすれ込んでいるこの研究結果が出たシラスウナギ漁。本県では3年連続の不漁に見舞われている。宮崎市・大淀川河口

